

「日常という名の奇跡」

岐阜市立岐北中学校 3年
堺 寧

「兄弟いるー？」

そう聞かれると私は困ってしまいます。少し悩んで、「いる。」と答えるときもあれば、「いない。」と答えるときもあります。

それは私がたった一人の弟を亡くしているからです。

私の弟はダウン症で、生まれた瞬間から体が弱く、人生のほぼ全ての時間を病院で過ごしていました。それでも弟はいつも笑っていて、そんな弟が可愛くて可愛くて仕方がなかったです。弟は何度も難しい手術を乗り越えて、「奇跡だ。」と言われていました。頑張っている弟の姿をみて、「お姉ちゃんも頑張らないと!」と思っていました。

そんな中、弟の体がかなり弱ってきているから、いつでも側に行けるようにと、病院の計らいで特別に集中治療室に私も入れてもらえることになりました。そこで初めて、「弟は死んでしまうのではないか。」という不安がよぎりました。でも今まで弟は何度も奇跡をおこして来たから絶対に大丈夫だと信じていました。しかし、奇跡はおこりませんでした。

弟は私たち家族の目の前で、たった3歳で息を引き取りました。みんなで弟の手を握っていました。全員がひたすら涙を流す中、母が弟に、「やっと楽になれたね。」と言いました。すると父が、「違う。楽になるってのは病気が治って、一緒に公園でキャッチボールしたりとかな…。」と言いました。その言葉に、私は弟と公園に行って遊ぶことさえできなかったのだと、ショックを受けました。今でも、この言葉を思い出すと胸が締め付けられます。

今は毎月、弟の月命日の6日にお経をあげています。その度に、私は後悔していることを思い出します。もっとたくさん絵本を読んであげればよかった。もっと遊んであげればよかった。もっとたくさんのおもちゃを作ってあげられたらよかった。もっと、もっと…。どれだけそう思っても、もう弟はいません。

私が大勢の人の前で、弟の「死」について話をするのは初めてです。正直、辛いから思い出したくないし、まだ受け入れられていない自分もあります。だから、「兄弟いるー？」という誰でも答えられるような簡単な質問にも答えられないのです。それでも今回この場に立っているのは、どうしても伝えたいことがあるからです。それは、家族との時間を大切にしてほしいということです。

私と同世代の人なら、思春期などで、親と関わることを避けていたり、兄弟姉妹に強く当たってしまったりすることがあるかもしれません。しかし、私はもう二度と後悔したくありません。だから今、家族との時間を大切にしています。学校に行く時「いってきます」と必ず言ったり、毎日のご飯をみんなで話しながら食べています。

今、皆さんが家族と過ごす日常は、当たり前だと思ってしまいがちですが、誰でも有限であり、「奇跡」です。明日、今までと同じ日常が失われるかもしれません。こういわれても、「そんなわけないじゃん。」と思うかもしれません。私もそう思っていました。誰だって「他人事」ではないのです。

くだらないことで笑いあえること。朝起きて家族がすぐそこにいること。怒られて腹が立つことさえも家族がいなかったらできないことです。その何気ない日常を全力で大事にしてほしいのです。

私のこの話を聞いて、皆さんが皆さんなりに、家族との時間を少しでも増やせたら、家族にもう少し優しくできたら、と思います。

今日、あなたは家に帰って何をしますか？